



2016年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会の様子

PBL

Project-Based Learning

推進支援センター通信

VOL. 15

同志社大学では、PBLを基本とする「プロジェクト科目」を2006年度から開講しています。本科目は全学共通教養教育科目として設置されており、「キャリア形成支援科目群」のなかに位置づけられています。毎年、20科目程度が開講されており、200名から250名の学生が履修しています。延べ開講科目数は200科目を越え、履修者数も2500名に及んでいます。

そこで、今回は「同志社大学プロジェクト科目10年の歩みを振り返る」というテーマのもとに、年表を作成し、過年度履修生・科目担当者・事務局職員から当時のエピソードなどを交えて「プロジェクト科目」に対する想いを寄せていただきました。過去の歩みを振り返り、未来に繋げていくことができればと思っています。

プロジェクト科目はいかにして始まったのか ～PBL導入の成功因子～

同志社大学PBL推進支援センター長
文学部教授 山田和人

プロジェクト科目がいかにして始まったのか、その経緯は今後PBLを導入する諸機関の参考になるかもしれないので、開設の準備から現在まで10余年にわたり科目を推進してきた立場から振り返ってみたい。

2006年度にプロジェクト科目が開設する前に、課外プロジェクトとして京田辺校地ローム記念館プロジェクトと正課科目として文学部特殊演習(プロジェクト科目)を開設・運用し、それらの経験を踏まえてテーマ公募制と教養教育を統合したプロジェクト科目が誕生する。

実は、このプログラムの開設の背景には全学共通教養教育科目の再編という流れがあった。ちょうどこうした学内ニーズと新しい実践型参加型のPBLを導入した教育プログラムのねらいが一致した。それは大学と社会の関係を見直し、大学教育に社会の教育力を導入するという大胆な試みでもあった。これが「社会の教育力を大学へ」というコンセプトとなった。

テーマ公募制は採択されたテーマの提案者を同志社大学嘱託講師に採用するという人件審議も伴うだけに副学長のリーダーシップも大きかった。徐々に学内の受入基盤が整い開設に向けて準備が進んだ。ちょうどその時、テーマ公募制を導入することが大手新聞に取り上げられ、初年度は187件という記録的な応募数となった。教務課のスタッフはフル回転でそこで採択された20科目を越える数のプロジェクトの学習支援を行った。嬉しい悲鳴だった。

この科目を運営するためにプロジェクト科目運営委員

会を新設し、さらに教務主任連絡会議の各学部の教務主任がテーマの審査及び採択、人件審議などの作業を業務として分担する協力体制が整った。

その後、プロジェクト科目が文部科学省の現代GPや大学教育推進プログラムに採択されたことは御存じの通りであり、学術振興会などからも高い評価を得た。振り返ると、全学的なイニシアティブを発揮した副学長、新設のプログラムを設計・運営した熱心な推進者、科目運営のために組織された学部を横断する教員組織、それを運用する優れた事務職員が揃っていた。幸せな偶然としか言いようがない程、見事な人と人とのつながりがあった。

ここに参加した履修生のモチベーションの高さは言うまでもない。今までなかったものが立ち現れる瞬間に立ち会うのは文字通り未知との遭遇だったのだろう。成果報告会も熱気に満ちていた。公募された科目担当者とそれをサポートする学内専任教員(科目代表者)も試行錯誤しながら全力で取り組んだ。そうして履修生にとってサブゼミのような豊かな学びのコミュニティができあがった。

チームで学ぶ喜び、それゆえの苦しさ、それを乗り越えた達成感、そのプロセスで身につけた骨太な学びの構えがかれらを逞しくしていった。それを間近で見ることの幸せを感じた10年だった。来年度はいよいよ12年目を迎える。より豊かな、社会に開かれたオープンマインドなプロジェクト科目の学びを、今後もPBL推進支援センターは支えていきたい。

同志社大学プロジェクト科目 10年の歩みを振り返る

プロジェクト科目とは？

2006年度から始まったPBLによる教養教育の実践である「プロジェクト科目」は、教員が一方向的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、地域社会や企業の方々から提案いただいたテーマについて、履修生自身が構想、計画し、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを進行していきます。



【履修科目】

2006年度「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」履修生

学び手の主体性を引き出すには、機会を与えるだけでは不十分だが、介入により主体性を奪ってしまえば本末転倒である。これは全ての教育機関にとっての課題であるが、この科目は「無意識のうちに、学生が主体性を発揮してしまう工夫」に溢れている。プロジェクトを進めるには他者の協力が不可欠であり、自ら働きかけなければ何も動かないが、思いを適切に伝えれば応えてもらえる。それが成功体験になり、学生は主体的に動くことの楽しさを知る。

福田 紫野 さん

私にとって、この科目は風車のエンジンのようだった。風を受け自ら回転する風車も、起動時にはエンジンが必要だ。この10年間、風車を回し続けることができたのは、きっかけとなるエンジンに出会えたからである。



【履修科目】

2007年度「量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通」履修生
2008年度「「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト」履修生

プロジェクト科目を通して自分から積極的に動くことの大切さを学びました。2007年度「量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通」プロジェクトで国土交通省のモニターツアーを企画しました。

川岡 鮎美 さん

井手町・和東町という、当時は全く知らない地域を舞台にツアーと作るということで何度も現場に足を運びました。ツアーになる場所を探し、協力していただく方と自分たちで交渉へ行き、地域の方たちとの触れ合いを通して町のことを学びました。観光のプロの厳しさ、地域の方の優しさ、豊かな自然、文化に触れ、様々な経験をしました。一から作り上げることの苦労はありましたが、行動し続けることで道は開けることを教えていただきました。自分自身の成長に繋がるプロジェクト科目は、有意義な成長の場であったと思います。



【履修科目】

2016年度「プロバスケを盛り上げよう！～認知向上・集客をマーケティング」履修生

高橋 拓 さん

私は、プロジェクト科目によってかけがえのない経験をしました。授業内容は、様々な人とのコミュニケーションや社会にアクションを起こす事など苦勞の連続で想像を絶するタフなものでした。限界までストレスを溜める事や諦めかけた事もありました。しかし、苦勞した分、様々な事を学びました。中でも特筆すべき事は「物事の本質を考える力」と「人の繋がりの重要性」という人間力の部分です。目先の成功に捉われず、本当に意味がある事は何なのか。また、私達の活動は多くの方の協力により成立したため、人の繋がりに新たな価値が生み出されるのだと感じました。今後は、この授業で得た全ての事を活かして新たな人の繋がりを作り、価値を創造できる人間を目指します。



学外での活動



【担当科目】

2010年度「花で生きる力を高める～花を活用する生活と社会活動の企画実践プロジェクト～」
2011年度「花で人をつなぐ！～介護、支援の場で新たな取り組みを考える～」
2012～2013年度「世界遺産をデザイン～花「桜」と共に生きる吉野山プロジェクト」

浜崎 英子 氏

プロジェクト科目を担当した4年間のあらゆる経験は、今も私の中で成長し続け、人生や仕事での力になっています。卒業後も続く学生たちとの関係、困難や失敗と向き合うとき、目標を成し遂げたいとき、授業での記憶のページをめくり、進むべき方向を見出そうとしています。

良好な人間関係が、秋にはクラス崩壊寸前。でも踏ん張って社会で高い評価を得る成果を出したクラスの卒業生は、「あのときの逃げない選択が自分を変えたんだと、今になってやっと思う。」と話します。

PBL教育は、人間は生来、主体的な自由意志を持ち、欲求、目標、成功に向かい、自らを開発し続ける存在であることが十分に尊重された教育です。その教育の成果は、学生のみならず、周囲の人々も生涯にわたり変化させてくれるでしょう。



【履修科目】

2007年度「からだと心のための演劇+音楽ワークショップ」履修生
2008年度「「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト」履修生
2009年度「京都の伝統織物の情報発信プロジェクト」履修生
2009年度「わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト」履修生

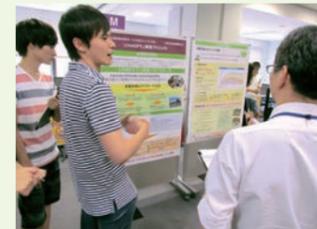
堀内 ゆうき さん

プロジェクト科目で「いいですねゲーム」というワークショップをしました。二人一組で会話をしますが、何を言われても否定的な言葉で返してはならず、常に「いいですね」から話を始めます。自分の意見を曲げるわけではなく、相手の話をよく聞き、肯定し、その上で自分の提案をする。すると、お互い不思議といい気分になり、会話が弾みます。

社会に出ると、どうしても共感できない意見に出会うことがあります。でも、よくよく耳を傾けると、それはその人なりに筋が通った考え方なのだと分かります。自分と違う価値観を拒否せず受け入れる。難しいことですが、あれから8年経った今も、私は「いいですねゲーム」に支えられていると感じます。



プレゼンテーション形式の成果報告会の様子



ポスターセッション形式の成果報告会の様子



【担当科目】

2006～2012年度「生きた「京ことば」映像アーカイブ化プロジェクト」
「子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト」
「祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！」等
2016年度「留学生と創る「錦市場」京の食文化読本」制作プロジェクト」

遠藤 正彦 氏

PBL科目担当者として意識している点は、学生は「主体性」さえあれば「失敗」を自己省察する事で飛躍的に成長するという事です。それに気づかされたのは2007年度「子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト」でした。教材コンセプトを創り上げていく事で学生達は「主体性」を醸成していきました。そして、自分達が作成した教材案を小学校教員から「子どもの立場に立っていない」と差し戻しをされた際に、自分達の知識を絶対視し独善的に社会に伝えても通用しないということを痛感し、それまで正解を見つけない学習に慣れていた学生達も、コミュニケーションを通して創り出していく事がプロジェクトの本質であり、また社会の本質にも繋がるということを発見したようです。PBL科目は主体的に社会を創りだすリーダーシップを育む科目だと実感しています。



【担当科目】

2008～2010年度「出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～」
2011～2013年度「心ゆくも「絵本」に出会う～絵本ソムリエプロジェクト～」
2014～2015年度「絵本百花～最愛の1冊に出会うプロジェクト～」
2016年度「永遠の憧れ「絵本の世界」に出会うプロジェクト」

上野 康治 氏

履修生が主役となって、やりたいことをできるようにする。担当者は脇役となって、その実現を目指す。そうしたプロジェクト科目では、様々な学部学年の履修生が春にはじめて出会い、授業テーマを手がかりに一年間を駆け抜ける。気づくとプロジェクトは学外の協力先も巻き込み、履修生ははじめ誰も想像していなかった最終成果が生まれている。その過程で印象的なのは、履修生のジャンプ。最初は様子見だった協力先の方々が、履修生のがんばる姿に感化され、アドバイスをくださる。そこから履修生がヒントを得て飛躍するのだ。私はその光景を何度も目にして、履修生がまわりを活気づけ、活動を自らのものにしたとき、プロジェクトは輝くと考えている。



弘田 一恵 氏

2006～2016年度 教務課教務係勤務 プロジェクト科目コーディネーター

事務局という小さな窓からも、学生さんの気持ちやプロジェクトの様子が届いてくることがあります。毎年出会うのは、リーダーやサブリーダーなどの役割を与えられた学生さんが、迷い、戸惑い、悩み、ぶつかり、挫折する姿と、チームとして支えあう力がプロジェクトを前に進め始めた時のメンバーの頼もしく輝く笑顔です。それは必ずどこかのチームで起きている、素敵な化学反応です。プロジェクト科目は、彼らに内在するちからを引き出し、気づかなかった可能性を見出し、さらに、新しい力を身につけるという科目であること-自己と向き合う科目、他者と磨きあう科目、社会とつながる科目であることを実感します。実は、「わたしたちの未来を創る科目」なのかもしれません。

2006

- ・テーマ公募による教養教育科目「プロジェクト科目」を開設
- ・成果報告会を校地別に開催(春・秋学期ともプレゼンテーション形式)
- ・平成18年度 文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム「公募型プログラムによる地域活性化」採択

2007

- ・シンポジウム「学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!!-地域・社会が学生を育てる-」開催

2008

- ・シンポジウム「第2弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!!-地域・社会が学生を育てる-」開催

2009

- ・「プロジェクト科目」は全学共通教養教育センターの「キャリア形成支援科目群」に再編
- ・PBL推進支援センター 開設
- ・平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育」採択
- ・シンポジウム「未来を切り拓くPBL-「教育」の壁を越えて-」開催

2010

- ・成果報告会を両校地合同(春学期京田辺キャンパス、秋学期今出川キャンパス)での開催に変更
- ・また、発表形式も春学期はポスターセッション形式、秋学期はプレゼンテーション形式に変更
- ・シンポジウム「PBL教育における多面的評価-社会が求める人材像-」開催
- ・シンポジウム「PBL教育における多面的評価-PBLは社会で役に立つか-」開催

2011

- ・京都市営地下鉄今出川駅南改札内ショーウィンドウにて、プロジェクト科目の成果報告物掲出開始
- ・シンポジウム「第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!!-誰が何をいかに評価するのか?-」開催
- ・PBL教育フォーラム2011「学生のヤル気を引き出すPBL-実践的な学習をサポートする支援としかけ-」開催

2012

- ・大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム事業結果について、「特に優れており波及効果が見込まれる取組」に選定
- ・PBL教育フォーラム2012「チームの学びを引き出すPBL-チームが個人を伸ばすのか、個人がチームを伸ばすのか?-」開催

2013

- ・成果報告会の発表形式を春・秋学期ともポスターセッション形式に変更
- ・京都市営地下鉄今出川駅北改札ショーケースにて、プロジェクト科目の成果報告物掲出開始
- ・PBL教育フォーラム2013「PBLにおける学習効果の検証-卒業後の現場から-」開催

2014

- ・シンポジウム「社会・地域・産学連携の最前線を問う-連携教育としてのPBLの可能性と課題-」開催
- ・PBL教育フォーラム2014「アクティブ・ラーニングにおける学習支援について考える-学習支援者としての学生の役割と、その可能性-」開催

2015

- ・PBL教育フォーラム2015「(質のよい)失敗から学ぶPBL-何ができたようになったのか-」開催

同志社大学PBL10年の歩み

2016年度プロジェクト科目 秋学期関連事業開催報告

◆2016年12月5日(月) 秋学期プロジェクト・リテラシー講習会

春学期に実施した第1回目と同様に、パワープレイス株式会社濱村道治氏を講師に迎え、「伝えるちから～ポスターセッション」と題してプロジェクト・リテラシー講習会を開催しました。2回目となる今回は、秋学期成果報告会の仕様変更に伴い、大人数に対して効率よく的確に伝えるポスターセッションのスキルを教授していただきました。講師陣による3パターンのデモンストレーションが行われた際には、客観的に春学期の発表を振り返り、反省点に気付いて「はっ」とする学生も多かったようです。短時間で想定問答集を作成してセッションを行うグループワークでは、聴衆に成果を伝えることの難しさや、メンバー間で情報を共有しておくことの重要性を実感しているようでした。参加した学生からは、成果報告会に向けて事前にしっかりと準備を整えたい、といった意欲に満ちた声が多く聞かれました。



◆2017年1月11日(水) 秋学期学生懇談会 ◆2017年1月28日(土) 秋学期科目担当者・代表者懇談会

学生懇談会では各プロジェクト科目の履修生代表が一同に会し、1年間の活動について振り返りつつ、PBL学習の良い点・改善点というテーマのもと、意見交換が行われました。多くの履修生が、活動を通して発信力や主体性などを身につけたと述べましたが、同時に、授業時間数や、メンバーによって参加度に違いがある点などは改善点として指摘されました。授業時間数については、単純に時間数を増やせば解決するのだろうか、といったような本質的な意見が出たり、メンバーの参加度に関しては、チームビルディングを課題としてあげる学生も見られました。



また、担当者・代表者懇談会では、まず、各担当者・代表者から今年度の授業運営についての報告が行われました。スケジュール管理やモチベーションの維持など、学生主体の授業ならではの難しさを語る担当者が多く、このような授業運営の課題については、具体的な例をあげて前向きな意見交換がなされました。それぞれの経験に基づく意見や提案が活発に交わされ、今後に繋がる意義のある議論が展開されました。

◆2017年1月18日(水) 第3回SA/TA協議会

秋学期も終盤にさしかかり成果報告会に向けて各クラスが成果をまとめる頃、各クラスに1名ずつ配置しているSA(スチューデント・アシスタント)、TA(ティーチング・アシスタント)が集まり、第3回目の協議会を開催しました。今回は、各々が学習支援者として心がけた事と、担当クラスの活動についての達成度を客観的な視点で振り返り、互いに報告しました。外からみえる活動の成果だけでなく、クラスの活動の過程や内容を冷静に分析した報告が多くみられました。報告の中で課題としてあがった、プロジェクトに対する取り組み方や姿勢が異なる履修生が学生主体でプロジェクトを遂行していくにはどのようにすればよいか?という問いに対して、様々な提案や意見が活発に交わされ、今後の学習支援の仕組みづくりに取り入れていきたい貴重な声が聞かれました。



◆2017年1月22日(日) 秋学期成果報告会

今出川校地良心館ラーニング・commonsにて、秋学期成果報告会を開催し、春学期・秋学期連続科目14クラス、秋学期科目1クラスの履修生が、ポスターセッション形式で最終報告を行いました。当日は、企業や教育機関関係者、過年度履修生、保護者の方など、約240名が参加し、会場は終始活気に満ちていました。

各クラスのポスターの前では、履修生の報告に対し聴衆からも質問や課題が投げかけられるなど、活発なやりとりが見られました。また、積極的に聴衆に声をかけ、呼び止める履修生の姿からは、自分達の活動を伝えようとする熱意が伝わってきました。

ポスターセッション終了後は、学内外の審査員より講評をいただきました。結果だけでなく活動の過程も重視している点や多くのクラスが一定の成果に達成していることに関して高く評価された一方で、学生ならではのオリジナリティや独創性に欠けるといった厳しい指摘や、活動内容や成果により深い社会的意義を求めるといった声も聞かれました。

表彰式では、最優秀賞、優秀賞、特別賞の受賞クラスが発表され、互いに健闘を讃え合う履修生たちの表情は、皆、晴れ晴れとしたものでした。



- 最優秀賞:「グルメ同志社のお店100選」企画・発行プロジェクトについて (今出川校地開講、春・秋学期連続科目)
- 優秀賞:留学生と創る「錦市場:京の食文化読本」制作プロジェクト (今出川校地開講、春・秋学期連続科目)
- 特別賞:プロバスケを盛り上げよう!～認知向上・集客をマーケティング (今出川校地開講、春・秋学期連続科目)

同志社大学プロジェクト科目 Twitterはじめました!

履修生の活動報告、企画イベントの案内、事務局の裏話など...いろいろな出来事を情報発信していきます。

お気軽にフォローして下さい。

https://twitter.com/PJ_doshisha

@PJ_doshisha



山田センター長の つぶやき



同志社大学PBL推進支援センターの山田和人センター長によるコーナーです。

難問があればあるほど取り組み甲斐があります。無理かとも思うところを少し踏ん張って、もうしばらく続けてみることで、乗り切ることができることもあるものです。そう思って、続けてきたら10年経っていたというようなものではないでしょうか。大げさなことではなく、ささやかな積み重ねかも。

～山田和人センター長 Twitterより抜粋～